

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 3 部門第 4 区分

【発行日】平成 20 年 9 月 25 日 (2008.9.25)

【公表番号】特表 2005-508450 (P2005-508450A)

【公表日】平成 17 年 3 月 31 日 (2005.3.31)

【年通号数】公開・登録公報 2005-013

【出願番号】特願 2003-542675 (P2003-542675)

【国際特許分類】

C 2 5 B 11/08 (2006.01)

B 0 1 J 27/045 (2006.01)

B 0 1 J 37/20 (2006.01)

【F I】

C 2 5 B 11/08 Z

B 0 1 J 27/045 M

B 0 1 J 37/20

【誤訳訂正書】

【提出日】平成 20 年 7 月 25 日 (2008.7.25)

【誤訳訂正 1】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 2 0

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 2 0】

容器を超音波浴中に 20 分間置くことで、金属及びカーボンブラックの混合物をさらに処理する。容器を、窒素で 30 ~ 60 分約 30 L/hr の速度でパージする。所望の流量で、典型的には約 8 ~ 9 リットル / 時で、容器を通して H_2S の通気を開始し、同時に、窒素を 30 L/hr で通気し続ける。 H_2S の通気を開始してから 5 時間後に、溶液混合物の少量の試料を採取すべきである。これをろ過し、XRF または UV - VIS を用いて Rh 濃度を検査して、炭素担体表面の生成物の吸着を確認する。炭素表面の生成物の完全な吸着を確認した後に、硫化水素流れを止める。窒素パージを一晩続ける。翌日、容器を少量（約 30 mL）の濯ぎ液で洗浄する以外は洗浄せずに、触媒を、真空ポンプを使用してブフナー漏斗を通してろ過する。ろ過した中間体を約 120 の温度で一晩オープンに入れる。乾燥後に、アルゴンで 1 時間室温でパージすることで、炉を準備する。連続的な不活性パージを行いながら、炉の温度を 1 時間室温から 650 に上昇させる。温度を 650 で 2 時間保持する。加熱器を停止した後に、炉をアルゴン中で一晩室温に冷却する。一旦炉から取り出したら、触媒を分析し、ガス拡散電極または膜電極アセンブリへと製造する。

【誤訳訂正 2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 3 0

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 3 0】

実施例 2 において説明した一連のガス拡散電極を、実施例 1 または反例 1 の方法によって製造した触媒を用いて製造する。下記に説明するように、得られたガス拡散電極を、実験室用試験槽を使用して試験する。電気分解の実験室用試験を、図 2 のスキームに従って準備する。露出した電極の表面積は 100 cm^2 であり、膜はナフィオン 324 だった。陽極は、酸化ルテニウム触媒を用いて活性化したチタンメッシュだった。酸素を、2.5 倍の化学量論的過剰量までの割合で、約 5 cm の水圧で陰極に供給し、13 ~ 15 % の水性塩

化水素電解液を陽極に供給した。電解液の流量は、背圧 2 0 0 mbar で $0.372 \text{ m}^3 / \text{時} / \text{cm}^2$ だった。特に断らない限り、槽電圧を 4 kA/m^2 で 3 日間の作動後に記録する。全ての電圧はカレントコレクタ抵抗に関して未補正だった。槽及び電解液の温度を 55 ± 5 で保持した。